F-2　仙台市若林区荒浜地区　2012年12月25日（火）

報告者名	川島　秀一	被調査者生年	1934年（男）
調査者名	川島　秀一	被調査者属性	漁師（F-1話者）
補助調査者	植田今日子		

震災前の漁業

①　貞山堀の漁業

3〜5月まではシラスウナギを捕ったが、荒浜で漁業権のある人は7人いた。

7〜9月までは土用シジミをジョレンで捕ったが、漁業権をもっている人は40人いた。

他にドジョウも地獄網と呼ばれる網で捕った。

②　地先の海での漁業

底曳き網で捕る貝類は、アカガイ・ホッキガイ・ナミノコ（コダマガイ・オキハマグリとも呼ばれる）などである。

7〜8月まで底曳き網が休みのときは、刺網・ツブカゴ・ハモドウ・サワラ流し・カツオやシイラのバケ曳きを操業していた。カガジ（ヨシキリ）が鳴くようになるとウナギが来ると言われた。震災後もウナギは来ている。

イワシは荒浜の魚名で、オオバイワシ・チュウバイワシ・ウルメイワシ・ナナツボシなどが捕れたが、ハリガネイワシとセグロイワシは、カツオの餌になった。

他にギハギ・ネコタロベェ（スイツケボッケ）なども捕った。

③　海鳴りなど

風が吹く方向を知るために聞く。たとえば、南が鳴っていればミナミから風が吹く。

また、「金華山に雲がかかれば雨が降る」などの言い伝えがある。これらは、15〜16歳ころに、建網に加わっていたときに年寄りたちに教えられた。

震災時の漁船の動向

荒浜の漁師たちは、15年くらい前から仙台新港に漁船を置いている。荒浜からは軽トラックで15分、バイクでは9分で行ける距離である。震災時、船は灯篭流しの舟のように流れていった。火災で燃えた船は10艘以上あった。無事に沖出しができた船も、戻るのに2日かかっている。話者の船である大吉丸は、震災から12日目に北へ流されていることが発見された。

震災後の漁業

震災後、しばらくは地先の海底の瓦礫とりを無事だった数艘の船で行なっていた。日当で、人間は12,000円、船を出せば1艘に付き22,000円が支給された。

アカガイについては、8月20日から放射能の検査を経てから、9月1日から10日まで操業を開始してみた。震災後は共同操業になり、タルを平均で分けている。震災後、ヘドロが津波で流されて海底の環境が良くなった。ただし、アカガイが生息する漁場は、岸から沖の方へ動いている。ツブ貝の方は豊漁で、震災前は1キロ300円であったのが、1,700円で売られている。